

On the Occasion of My Retirement

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sunahara, Yoichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30288

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



退任にあたり

砂原 陽一

1981年に東北大学の大学院生から金沢大学の教養部に採用されて以来30年が経った。金沢には縁があった。七尾線の宇ノ気の手前に横山という無人駅があるが、私の曾祖父が明治の時代にそこから北海道に渡ったのである。私のルーツの家は今も横山に砂原という名で続いている。ずいぶん昔にそこを訪ねたことがあるが、なるほど家の裏はずうっと砂原が広がっていた。思いで話は芸がないのでしない。研究においても教育においても微々たるものしか残せなかったが、学生諸君に教えるのは割合好きだった。特に外国語による演習で、始めの頃は覚束ない読みしかできなかった学生が私なりの訓練を通じて段々できるようになり、本人も自信をつけていくのを見るのが喜びだった。学生の潜在力には侮らざるべきものと確信している。今年1月の講義でのことだった。予め準備したうえでの話でなかったのだが、なにかの関連でフランクルの『夜と霧』に出てくるあるエピソードを紹介した。それは自らアウシュビッツの強制収容所の極限的な体験を経たフランクルの見た収容所における一人の若い女性の死の思い出である。「この若い女性は自分が近いうちに死ぬであろうことを知っていた。それにも拘らず、私と語った時、彼女は快活であった。「私をこんなひどい目に遭わしてくれた運命に対して私は感謝していますわ。」と言葉どおりに彼女は私に言った。「なぜかと言いますと、以前のブルジョア的生活で私は甘やかされていましたが、本当に真剣に精神的な望みを追っていませんでしたからです。」その最後の日に彼女は全く内面の世界へと向いていた。「あそこにある樹はひとりぼっちの私のただひとつのお友達ですの。」と彼女は言い、バラックの窓の外を指した。外では一本のカスタニエンの樹が丁度花盛りであった。病人の寝台の所に屈んで外を見るとバラックの病舎の小さな窓を通して丁度二つの蠟燭のような花をつけた一本の緑の枝を見ることができた。「この樹とよくお話ししますの。」と彼女は言った。私は一寸まごついて彼女の言葉の意味が判らなかつた。彼女は譫妄状態で幻覚を起こしているのだろうか?不思議に思っただけに訊いた。「樹はあなたに何か返事をしましたか?——しましたって!——では何で樹は言ったのですか?」彼女は答えた。「あの樹はこう申しましたの。私はここにいる——私は——ここに——いる。私はいなのだ。永遠の命だ——。」

授業の修了間際でやや集中力が薄れかけていた学生諸君の顔に衝撃が走ったのが見て取れ、同時に教室に厳粛な空気が支配した。さりげない話をしたつもりの私には驚きだった。現今の学生も捨てたものではないという深い印象を私に残した。学生諸君にはこのような精神的な事柄を真直ぐに受けとめる心性をいつまでも持っていただくことを希望する。

私事にわたって恐縮だが、30年間の教員生活にあつて最も大きな出来事は、妻を病気で失ったことであつた。その後喪失感からなかなか立ち直ることができないでいた。ある日、かよっているジムで知りあつた婦人と話を交わした折りに、自分の娘が今名古屋で医師をしているが、先生の奥さんから金沢大学医学部時代に生化学の講義を受け、そのときの、小さな声で明晰に授業を展開し、ときにはおちゃめなことを言うという娘の印象を教えてくださいました。私ははっと胸をつかれ、ああ妻は学生の思い出の中に生きているんだと目を覚まされ、その後やっと立ち直ることができた。私の30年もそうであるに違いない。善し悪しはあれ、とにかく授業をうけた多くの卒業生に私の思い出を刻印したこと、これ以上のことは望まない。

最後に哲学・人間学の同僚である柴田正良、三浦要先生にはいろいろな仕事を助けていただき深い感謝の念を申し上げます。